明治大学教養論集　通巻567号
（2022・12）pp. 75–99

# 『意味なきものの意味づけとしての歴史』（Ⅱ）

テオドール・レッシング著
田　島　正　行　訳

## Ⅰ
## 歴史の主体*
## (7-12)

＊すでにヘロドトスは歴史の語りをロゴス（λέγειν=「拾い集める」に由来する）という語で表している。この点に、歴史を形成するための集光レンズ（カテゴリー）が存在しなければならないという示唆が含まれている。その最高の集光レンズを我々は「歴史の主体」と名づけている。歴史の担い手を、対象や客体としてではなく、主体として表すのは、カント以前の一般的な言語使用につながっている。

### 7　統一としての歴史

時間を歴史の形式として前提することで、我々はいまや時間における歴史の統一を、すなわち時間の知覚の単なる並存や順次としての歴史ではなく、出来事の連関としての歴史を考察する。

この連関が基本的自我（人々はそれをいまや、国家、国民（ネーション）、民族精神、一般人、客観的精神その他と呼んでいるが）という定数をすでに前提としていることはまったく明白である。すなわち、その歴史として我々がすべての歴史を関係づけるあの歴史の主体、歴史の内容の中で経験を通じてけっして発

見されることもなく、また歴史の内容を通じても魔術的に姿を現すこともなく、歴史を能動的に書き、能動的に思考しうるための形式である歴史の主体、これを前提としているのである。たとえば我々がヨーロッパのある歴史、社会主義政党の歴史、菜食主義者団体ポモナ[訳注1)]の歴史について語るとすれば、まさにヨーロッパ、社会主義政党、菜食主義者団体ポモナが、その歴史を私が確認しうる前に、すでに現実と考えられていなければならない。それは歴史を通じて、歴史と共にはじめて成立するのではけっしてない。それは歴史の経験内容ではない。

しかし歴史の中を歩んでゆくこの歴史の主体は、我々自身の姿の自我に関わる反映以外の何であるのか、それ以外の何でありえようか。それは、人類のすべての関心、幸福の欲求、自己保存志向を帯びた一種の人間の似姿ではないのか。

一般人。しかしそれはまた、思考の型にはまった、完全に人柄や固有性を欠いた、完全に無関心な、いわば灰汁（あく）抜きした人間、特徴のない人間の謂である……。なぜなら、ドイツはドイツの個別の魂だけから、ヘラスはヘラスと感じる個別の魂だけから、キリスト教はキリスト教徒と感じる個別の魂だけから成立しているように、そしてその新陳代謝が身体を形成している細胞がもはや現存していない場合でも身体は成立していると主張することが無意味であるように、歴史の現実は何よりもまず、感じながら動いている個別の魂のカオスと結ばれているのである。この個別の魂のそれぞれは、その独自な意味システムを身内に持っている。そしてこの個々の意味システムすべてからいわゆる歴史上の真理が、すべての部分的価値や部分的関心を無視することではじめて獲得される。体験に近いすべての現実からはなはだかけ離れた抽象化という非特質化する（灰汁抜きする）過程によって。歴史上の真理は、思考しながら－秩序づける悟性によって、生のより直接的な諸現実からいわば濾過されている。論理学や数学において、公式が包括的であればある

ほど、いっそう真であり、内容を欠いていればいるほど、いっそう包括的であり、公式は結局のところ単なる思考のフィクションとして、生きられる生から切り離される。それと同じように、歴史もまた客観的歴史の担い手の歴史として、結局のところ、まったく空虚な形式なのである。この形式は、私の欲望、私の苦しみ、私の欲求、私の愛、私の憎悪、要するに私の一体感（Einsfühlung）ないし反感（Gegenfühlung）が、特定の諸現実の特定の生命性でもって、つまり私の生命性でもってはじめて満たすことができるのだ。なぜなら、賛否のこの関与がなければ、すべての史実的（ヒストーリッシュ）なるものはまったく生気を失い、どちらでも同じであるだろうからである。しかし、それ自体重要ではなく、見渡せないほどの、というより際限のない諸々の出来事によって、我々自身が、また我々の個々の偏見ないし我々のグループの偏見が裏書されるか、もしくは非難されるかに応じて、我々は出来事に価値のアクセントを与える。これによって我々はいわゆる歴史上の連関を手に入れる。

この連関は一つの織物である。この織物において、我々は蜘蛛の巣の中の蜘蛛と同じように、常に変わることなく、すべての糸の中心にして起源である。たとえば、ギリシアの歴史はローマの歴史によって、ローマの歴史は最終的にゲルマンの歴史によって引き継がれたという思想は、単に今日の我々文化圏の研究思想の一つにすぎない。この我々文化圏の現実像は我々自身と共に成立し、また再び没落する。我々はたとえば古代ローマ帝国の残忍な血のオルギアを史実として、理性的なもの、必然的なものと判断しているが、それというのも我々自身がローマ帝国の成果の継承者としてその末端に連なっているからである。我々自身がその軛の下で奴隷のままでいたならば、この帝国に対するどんな悪態も厳しすぎるとはまず見なさなかったであろう。我々はきわめて馬鹿げた史的現実ですら、たとえばティムール[訳注2)]のような人間の凶行や残虐を、史実的に不可避な必然として判断している。というのも、ティムールの歴史的現象がなければ、今日トルコがヨーロッパを支配し、我々固有の尊重される世界史は現存しないだろうから。したがっ

てすべての歴史は、地上において何が起ころうとも、logificatio post festum（祭りの後の正当化）に基づいている。我々の歴史文献は、リエージュの征服[訳注3)]の際に踏みつぶされた菫の宿命を、ベオグラードの暗雲の形成[訳注4)]を、ルーヴァンの大火[訳注5)]における牛たちの苦しみを留めてはおらず、途轍もなく狭められた焦点によって、ある種の人間の利益団体にとり選択的に－有効なものを留めているのである。またこの有効なものの事情のすべてを必ずしも留めてはいない。なぜなら、すべての非－社会的なもの、非－政治的なもの、それゆえまさに本来の心的なものは、それが単に一回限りで、ただ個人的で、私的にすぎない限り、最終的にはただ亡霊のように－抽象的で無価値なあの国家の移動や版図の移動において「本質的」と見なされないならば、荒々しく引き裂かれるからだ。この国家の移動や版図の移動を人間は、自嘲しながら、結局「史的現実」と呼んでいるのである。――

したがって史的現実のあらゆる生起（Ereignis）は、結局のところ、一つの力学的（メヒャーニッシュ）な持続的生起（Anereignis）にすぎないのである。

„Sie modo quas fuerit rudis et sinne imagine tellus
Induit ignotas hominum conversa figuras“

「このようにして先ほどまで荒涼としてはっきりしていなかった大地が一変してこれまでは知られなかった人間の姿で飾られることになったのだ」[訳注6)]

## 8　自然科学への対応

だが、生が歴史へと征服され、屈服するこの過程は、自然科学の概念形成にまったく類似している。

自然科学においても、すべての一回限りのものや特殊なものの排除、ないし私が先に名づけたような灰汁抜き（非特質化）が問題である。これによって、強烈な質的諸感覚の体験された世界、体験でのみ感得される世界が、仮設的（フィクティーフ）諸量（たとえば、原子、単子、分子、エネルギー単位など）間の諸

関係の思考的－象徴的な名ばかりの王国へと換算される。それどころか私の自我すらも、思考される限り、けっして直接的体験ではなく、推定上の大まかな奥行きと表面をもつ一つの対象と言ってよい思考の措定なのである。（自然科学や歴史において）常に問題なのは思考による「生」の結合と律動化である。思考は、それ自体測り知れない、到達不能で－把握できない象徴から、算定されうる、限定された、調和的な、計測しうる「現実」を作り出す。二つの現実（自然科学の現実と歴史の現実）は仮設的である。両者は、直接的な－所与のものに対して超越的である。一方の現実は、他方の現実と比べてより真でもなく、より現実的であるわけでもない。

## 9　歴史は自然か、もしくは理性の創設か

8で述べたことの中に、もちろん一つの見かけ上の対立が、自然の事実と理性による創設の対立が潜んでいる。歴史が人間のグループによって我が物とされる（owned=所有される）ならば、歴史は自然の事実ではありえない。歴史が自然の事実であるならば、歴史形成に達する人間の精神的手続きもまた自然の事実であり、史的法則によって共に包摂されている。

たとえば、人間のグループの周囲への進出、土地分割の変化、自然なグループ化の過程や定住化の過程のあれこれの試み、それどころか戦争、革命、反乱は、何か人為的なもの、歴史制作者の所産であり、それに比べれば自然に任せる方がましなのだ、と主張することができよう。しかしまた同じ正当性でもって主張できるのは、歴史制作者がグループ化関係や定住化関係の自然なカオスを、できる限り、客観的秩序の網（ネット）に無理やり押し込めようとしなかったならば、逆に自然はまさに戦争、革命、反乱を示すだろうということである。

ここで問題になっている対立、自然としての歴史と理性の事実としての歴史の対立は、イギリスの精神史の特定の一事例において、すなわち1804年に国民経済学者ウィリアム・ゴドウィン[訳注7)]と自然哲学者トーマス・マル

サス[訳注8)]との間で勃発した論争において最もはっきりと表れているように思える。すなわち、マルサスはその優れた著作『人口論』の中で、貧困、過剰人口、悪徳や困苦を必然的自然法則として証明しようとした。一方ゴドウィンは、ひとえに人間の諸制度に、とりわけ間違った倫理や社会政策に、市民階級（ブルジョア）の生存の苦境や苦痛の責任をとらせがちであった。しかしこの論争においては、二つの歴史学派間のはるかに古い対立が鳴り響いていた。その一方が自然法の作り話をし、他方が理性法の作り話をしているのである。

どちらが正しいのか。両者ともまったく正しい。なぜなら、私が生の苦しみ、飢饉、革命、戦争を自然の生起と見なすのか、人間の諸制度の結果と見なすのか、これは空しい概念の争いに終わるだけだからである。そして、イギリスの実用主義者のように人間の諸制度の全世界を、理想を含めて、自然なもの、自然に生まれたもの、自然法則的なものとして表さねばならないのか、それともドイツのカント主義者のように自然と現実を一つの「表象」と呼ぶべきなのか、問いただすのは空しい概念の争いなのである。

しかし歴史記述者は至る所でこの概念の曖昧さの犠牲になっている。幻想が存在するところで、歴史記述者は現実を語っている。あくまで現実の思考から湧き出ているものを、彼は幻想として非難する。彼は「灰色の理論」や「生命の黄金の樹」の作り話をする[訳注9)]。しかし、どこでこの理論が始まるのか、どこでこの生命が終わるのか、彼はけっして明確に述べることができない。彼はたとえば現実政治について語るのを好む。しかしそれは何であるのか。いわゆる現実主義的政治家たちは、発展、進歩、理性を信じているのではないか。国家とは何か、彼らは知っていると思い込んでいるのではないか。彼らが「民族」と呼んでいる人間の総体にとって何が必要であるのか、彼らは分かっていると思っているのではないか。それどころか、彼らは人間について、人類について夢想しているのではないか。それは、ところで宿命的であるのか。国家、民族、進歩、発展は自然の現実であるのか。否。それは、我々自身が我々の体験に提出し、我々の体験に持ち込んでいる諸々の視

点である。結局、「灰色の理論」とは何か、「生命の黄金の樹」とは何か。

自然も歴史も、我々にはどうでもよい出来事も、我々が「史実」として把捉することのできる出来事も、それ自体のうちには、これに従って出来事が把握される意味（ズィン）を含んではいない。自然も歴史も、把捉する意識と形成する意欲から独立した精神的領域を明らかにしていない。また、たとえば精神がvis a tergo（後ろから押す力）として歴史を押し上げるものでもない。我々がいわゆる自然の諸過程を判断しながら篩にかけることで史的現実を作り上げる圏域は、歴史の内容から引き出すことができない。

## 10　歴史の内容

ところで――イデオロギーの価値の観点を別とすれば――歴史の内容とはいったい自然の何であるのか。蟻塚の意味なき生の悲劇。大地の維持を通じてにせよ、別な宇宙的破局を通じてにせよ、すべてが消滅するのと同様に跡形もなく滅亡するであろうときまで、なんとか暮らしてゆく蟻塚の生の悲劇である。

「間違った知識を与えられ、過ちを犯す若き国王たち、その償いをするすべての国王たち、追放された寵臣たち、放逐されて再び呼び戻された大臣たち、王家の縁組、本で読むような、こうしたどうでもよいことが一民族の歴史であるというのは、実際本当なのか。我々は幻想の犠牲者である。過ぎ去ったものについて、本の中では一つのイメージしか残っていない。そしてこのイメージは歴史家によって作り上げられたものであり、彼らは自分たちの偏見のために歴史を書く。歴史、それは歴史家の偏見を物語にしているのである。歴史の諸要素（エレメンテ）とは何か。言葉、常に言葉だ。君主の言葉、大臣の言葉、敗北した将軍の弁解、不興を買った取り巻きの怪文書、何らかの会議の長の言葉。――石に刻まれ、壁に描かれ、パピルスや羊皮紙に書かれ、紙に印刷された言葉の数々、そして紙は鼠たちに管理されていて、彼らが食らわない言葉が史実として後の時代に伝えられる」（ディアナ・パーレン「アク

ツィオーン」1916年）

ところで、これが歴史の内容であるならば、本に取り上げられた生は「観念（イデーン）」をめぐっていると歴史家が思うのはなぜなのか。彼ら自身が、それを取り上げることによって、観念をめぐっているからにすぎない。観念は歴史創設の主導杭である。あらゆる任意の史的生起、あらゆる体制の交替ないし行政の交替、あらゆる戦争、あらゆる革命は、観念の力の有効性を保証しているように見える。だが、史実上の観念の背後においても燃えているのは、多数の個人の集合された利己心であり、集合された愚鈍である。あらゆる見解の背後には意図があり、あらゆる洞察の背後には必要性がある。

それゆえ、一面からみれば、歴史の内容を成しているのは、自我に関わる暴力行為、強奪、殺戮に他ならないが、これらの核心は常に一方による他方からの収奪なのである。――（諸々の戦闘や戦闘者名をあれこれ永遠に悩むことで頭を満たし、若者の感覚を早くから損なうべきだとする理由が、ほとんど理解できない）――けれども他面からみれば、この自我に関わる暴力行為、強奪、殺戮すべてにおいて「観念」が働いているように見える。少なくともそれが常に口にされる。

主観的－崇高な動機、宗教の慰め、哲学者の詭弁が十二分に利用されなかった卑劣な行為が、これまで歴史において存在したか。客観的に－非道なものがどこかで規則や必然性になることなど放っておくがよい。美しい感情の全世界、君たちの学識ある書物、繊細な詩、君たちの戯曲や君たちの雑誌を執筆しているすべての無頼の徒は、おそらく純粋理性の殉教者になることはなく、父祖たちがしたのとまったく同じように、その時々の史的必然に従って彼らの理想を広げるだろう。歴史精神が乱用し、汚さなかったような純粋な陶酔は一つもないのである。

そういうわけで、価値の規範的領域と史実の領域はすでに原理的に敵対しているように見える。理性の規範に基づいて歴史上のカオスを判断することはできるだろう。しかし理性や倫理を歴史自体の中に見出すことはけっして

できない。むしろ、すべての人間の「理想」は大いなる必要性のために役立てられるということ、これはまさに歴史の本質なのである。行動する人は誰であれ、ゲーテが「行動する人は良心を欠いている」という言葉で捉えた認識を免れていない。そしてナポレオンの以下の言葉の認識を免れていない。「玉座につくと私はすぐに知った、手に入れられる幸福のすべてを望まないようにしなければならないことを。さもないと、世論が私の手に負えなくなってしまうだろう」（1800年2月）

植物において観察されてきたことは、それぞれの植物が一日経つうちにあらかじめ定められた範囲で常にその茎を中心として旋回していることである。植物学者はそれを回旋転回運動と呼んでいる。天体についても我々が知っているのは、それぞれの天体が、我々が住んでいる地球と同様に、常に自転しているということである。そのように人間、家族、信仰グループや信条グループも、ことごとくその現在にもっぱら心を占められて、絶えず自分自身の周りを廻っている。そして花のように、どれもがその種子で地球全体を覆いつくし、天体のようにどれもがどれをもその軌道から引きずり出したいと思っている。ただ万人の万人に対する抗争の必要のために自分自身に戻って堰き止められ、精神となる、把握し難い自我との関わりにおいて。

いまや我々は怯むことなく、ヨーロッパの学識が世界史と呼んでいる大いなる愚者の悲劇に登場する男優や女優をすぐ近くから観察してみよう。

それはどのような心情であるのか。その精神はどのような種類のものか。

たとえば、イギリスのジェームズ一世[訳注10]、ジョージ三世[訳注11]、プロイセンのフリードリッヒ・ヴィルヘルム一世[訳注12]やザクセンのアウグスト一世[訳注13]は、正真正銘の、疑う余地のない愚者であった。スウェーデンのカール十二世[訳注14]、デンマークのグスタフ三世[訳注15]、ナポリのフェルディナンド四世[訳注16]、スペインのカール四世[訳注17]のような、すべての無数の取るに足らない完全な発育障害や知能障害の者については言うまでもない。――ロシアのピョートル[訳注18]、フランスのボナパルトのような天才的犯罪

者で大規模な盗賊の首領。ティムール、チンギス＝ハン、イヴァン[訳注19]のような血に飢えた人間や権力者の手先、ルイ十四世[訳注20]、エカテリーナ二世[訳注21]のような偽善者や猫かぶり、ドイツ皇帝のカール六世[訳注22]、フランツ一世[訳注23]、フランツ二世[訳注24]、カール七世[訳注25]のような単なる痩せて無価値な人間。フランスのルイ十五世[訳注26]、イングランドのジョージ四世[訳注27]、オーストリアのレオポルト二世[訳注28]、プロイセンのフリードリッヒ・ヴィルヘルム二世[訳注29]のような放蕩者。ブラウンシュヴァイク、ヘッセン－カッセル、ヘッセン－ハーナウ、ハノーファー、ヴァルデック、アンスバッハ、アンハルト－ツェルブストのかつての多くの領主たちのような破廉恥な人肉商人。デュ・バリー夫人[訳注30]のような有名な娼婦、ポンパドゥール夫人[訳注31]のように自分の幸福を作り上げた可愛い浮気娘たち、エカテリーナ一世[訳注32]のような読み書きのできない野営地娼婦……このような「神の似姿たち」が地上において諸民族全体の運命を決定してきたし、いわゆる世界史の進路を定めてきたのだ。そして彼らのうちの誰に責任をとらせることができるだろうか。けれども、すべての被造物の中で最も有害な被造物ばかりでなく、最も呪うべき被造物もまた神の似姿なのである。カリグラ[訳注33]のような怪物、クラウディウス[訳注34]のような阿呆、ユリア[訳注35]やメッサリナ[訳注36]のような女性、彼らはすでに母体の中で捻じ曲げられていた。この奇形者たちの足に口づけをする人間に罪はないのか。玉座に就いた類まれな男や人間、ヨーゼフ二世[訳注37]やオレンジ公ウィリアム三世[訳注38]は、その民衆の憎悪を買った。しかしイヴァン四世[訳注39]やヘンリー八世[訳注40]のような恐ろしい野獣は、その死の際に民衆からイエスや仏陀以上に心から深く哀悼された。

私は19世紀の二人の頭脳荒廃者、ダーウィンとヘーゲルのあのぞっとする論理主義（ロギスムス）を価値の裏切りと呼ぶ。一方は自然を、他方は歴史を、あたかもカントのような人が生きていなかったかのように、論理的意味の自己啓示に仕立て上げた。

私はドイツの歴史記述者と歴史哲学者の理想主義を精神の裏切りと呼ぶ。彼らは、唯一至福を与える政策の独善的帝国業務の代数学ないし最後には宮廷の年代記すら、世界理性が骨を折らねばならない事件と見なしているのである。

歴史学に関するデュルタイの周知の定義、「人間とは何か、それを人間は自己探求を通じてではなく、また心理学的実験を通じてではなく、歴史を通じて知るのである」、これが正しいとすれば、この「自己認識」は人間に、人間とは愚者と野獣の混合物以外の何物でもないと教えることができたであろう。

## 11　歴史主義（ヒストリスムス）

我々は時間における統一としての歴史について 6 ～ 10 で論じた。時間において統一的に特徴づけられうる一つの過程としての歴史は、統一的な歴史の主体によって把握されうるということ、この想定のために、我々は 200 年このかた通例となっている歴史主義という表現を用いる。

歴史主義の典型はヘーゲルの歴史哲学である。この歴史哲学が想定しているのは、定立、反定立、総合の中で自己自身を思考する「理念」の自己展開を、地上の精神史が明らかにしているということである。その際、常に最新の精神状態は先行する精神状態のすべてを歴史的に「克服し、秘めている」。それによると、文学史、精神史、文化史、民族史は、万象の中で自己を体験する精神の発芽、開花、実りとして考察されるべきだという。

この歴史主義は精神病院入院患者の想定を秘めていること、あるプロセスの思考はプロセス自体であること、それゆえ例えば「自分自身を思考しているある神の思考」はまさしくこの神の自己展開でもあること、さらに目標や目的に向かって自己運動している精神という表象は力学的表象であること、これらのことを「史的頭脳」に教え込むことはけっしてできないであろう。「史的頭脳」は、進歩、展開、プロセス、理性の自己運動のようなフレーズ

でその乏しい冷静さを有頂天にさせているからだ。

しかしながら、古代も東洋も普遍的な精神史、芸術史、民族史等々の概念を有していなかったことは、少なくとも驚くべきことであろう。しかし、まさしくそれゆえに、過去の創造は何千年も続き、震撼させ、感動させる。なぜなら過去の創造は、歴史に苦しめられることなく、ただ瞬間と現在のみをきわめて親密に生々しく生活によって明らかにするからである。これに対して生の諸経過を伝統の連鎖に組み込むのは、力学の思想である。その際には、時空の統一が前提とされ、有機体のあからさまなアナロジーにしたがって一つの精神的機械が復元される。しかしこの機械は生命ではなく、生命の摸造である。

その限定された民族的地盤やその特定の地域的地盤を意識して主張する歴史記述は、まだしも最も誠実な種類の歴史記述である。一方、すべての諸時代、諸国家、諸文化等々を包摂するいわゆる普遍的歴史であり世界史であるとする、空虚な大言壮語をでっち上げることはできない。我々の最も包括的な「世界史」すらも、狭く限定された一種族の西欧の問題にとどまるのであり、それほど遠くない将来、ヨーロッパの文化が没落するときに、共に没落せざるをえないということ、これを我々はけっして忘れないようにしよう。

## 12　生命と現実としての歴史

書物に伝えられた歴史は常に意識における生命の反映であり、しかし生命自体ではない以上、生命と意識の現実との間に口を開けている同じ裂け目が、歴史の生命と歴史の現実との間にも口を開けているに違いない。

意識はそれに包摂される内容を含めて、けっして流れゆく連続体ではなく、再三消えては新たに燃え上がる火花に似て間歇的である。意識は、間歇しているがゆえにこそ、生きた生命のおおよその鏡になりうる。精神は無限小の仮説によってこの裂け目になんとか橋をかける。この仮説によって、あらゆる連続的過程は無限に多くの我々には知られていないエレメント、すな

わち微分から構成されたものとして考えられ、この微分は常にその総計、つまりその積分によってのみ我々に知られるのである。そういうわけで、火花のように閃く我々の精神は捉え難く流れゆく生命を急追するが、生命は精神のきわめて細かい網の目をすり抜けてしまう。その結果、精神は限りなく多くの静止点から構成されると考えられる運動の繊細極まりない織物を生命に被せるのである。しかしこの思考もまた力学である。歴史の世界は、それが意識の現実として我々に与えられている限り、けっして生命的なもの自体ではない。歴史記述者は、どれほど精確に細やかに、どれほど忍耐強く良心的に、生命の痕跡を探索しようとも、けっして生命に達することはないだろう。

## Ⅱ
## 想像的諸力
## (13-15)

### 13　諸力の想定

歴史の主体において歴史記述者は自我を転移し大いに人間化しながら、（自然科学者が自然、現実、世界を観察していると思い込んでいるのと同じように）連関する運命の系列を進行させるが、この歴史の主体に、また別の夥しい、より親密でより個人的なすりかえが加わる。このすりかえは、（重力、電気、熱などのような）自然の諸力のフィクションに準えねばならない。

世界史は、けっして実在していない〔観念的〕諸現実の自伝（ちなみに自伝それ自体は自己免責と自己形成に他ならない）でない限り、ごく近くで観察すれば、過ぎ去ってゆく。なぜなら、団体、党派、グループ、政党、民族、都市、国民、国家などは実際にまさしく一つの連隊のようなものだからである。連隊は、今日は昨日と別な兵士たちから編成され、明日は今日と別な兵士たちから編成されていながら、しかし連隊の歴史を持っている。その歴史は、ボロボロの旗、名前、数字以外、すべてのこの兵士たちの一切が残

らなかった場合でも、持続する。――まず容易にわかるのは、国家、社会、民族のような想像の審級にあの普遍的価値法則が適用されねばならないということである。すなわち、この価値法則に従えば、一つの価値グループの新たな同種の構成要素が増大するのに応じて、意味、注意、価値、関心が低下する。一つの小さな党派、政党やグループが重要で、価値があり、関心を呼び起こすかもしれない。しかし「人類史」はただ諸々の歴史から生まれた歴史、言い換えるとすべての風に流される泡の中で最も空ろな泡となりうる。そもそも歴史（ゲシヒテ）は、ヘーゲルやシェリングの言う意味で（「単なる史実（ヒストーリエ）」とは異なり）歴史哲学的なものとなるために、特別で個人的な個々の出来事を無視するのに応じて、興味のないものとなる。貴重で重要な個々の運命が連なる光景（ビルダーフルフト）として、歴史は常に喜ばしく、活気づけ、陶酔させる。それに対して、さまざまな高度に普遍的な連関の構成として歴史は、血の染み込んだ年間データや地域データ、退屈な文書、大方はまさに取るに足らない、しばしばまったく浅ましい家柄や階級の保証された者たちの間での単調な権力交替の偶然、こういった循環舞踏からけっして抜け出すことができない。ここには、至極当然にも、モンテーニュの言葉が当てはまるに違いない。「たいてい実際の歴史的事実はファルスである」。

### 14　客観的審級の価値逓減の法則

学年クラスの教師は中程度の平均の理解力に応じてではなく、きわめて能力のない生徒でも自分の言うことを理解し、ついて来れるように教えなくてはならない（それゆえ実際にはきわめてできの悪い生徒が教え方を規定する）。間違った組成の化学肥料を畑に与えると、土の最も有利な成分ではなく、最も不利な成分に応じて収穫が決まるという法則が農業にはある。それと同じように、あらゆる価値の維持はおよそ一般的には ab impo（底辺から）成立する。それゆえオーストリアの国民経済学者の理論によれば、価格は商品の平均的市場価格からではなく、最も安い生産者の側から決められねばな

らない。

したがって、民族の運命や大衆の事件の経験的担い手として一つの「客観的精神」を哲学者たちが託宣することがあれば、この「客観的精神」はともかく、中間の平均的人間と比べてさえ内容の乏しいものにならざるをえない。いずれにせよ、たとえばドイツ史の「客観的精神」はその歴史の頂点、たとえばカント、フリードリッヒ大王、ゲーテ、ショーペンハウアー、ニーチェといった個人と比べて、内実も内容もいささかも豊かではないであろう。むしろ一つのグループがグループとして持つすべての志操、動機、断念はとても月並みで、とても低俗なので、そのグループ内のそれぞれの個人の方が全体としてのグループに比べて通例より豊かでより深い。ここには周知の格言が当てはまる。„Senator Romanus bonus vir, senatus Romanus mala bestia“（ローマの元老員は立派な人間である、ローマの元老院は悪い獣である）。そしてドイツの民衆の言葉が当てはまる。「一人は人間、数人は人々、多数は獣」。

それどころか、当然こう主張することができよう。かけがえのない、歴史的に－重要で、天才的な、もしくは何らかの仕方で凡人に優っている、個々の人物たちが成長できる基盤をともかく用意すること、これによってひとえに、どのグループもグループとして享受している特権や優遇が正当化される、と。したがって貴族や王族の特権が正当化されるのは、ひとえにこうした階級的訓育が、他の方法ではまさに生まれないような、凡人の成長に優る人物たちをここそこで可能にすることが証明される場合だけであるだろう。こうした視点でのみ、特権を与えられた一族の年代記として、いわゆるこの世のお歴々の家族年代記として歴史を理解することが実行され、維持される。しかしその場合、支配的社会層がそれ自体として史実を規定しているわけではない。偉大かつ重要な個人が、自分の属している階層を正当化して支え、自分が現れ出た社会を規範化するのである。

したがって歴史は、それがどのように描出されようとも、結局のところ偉

大な個々の運命や個々の人格に向けられているのでなければならないだろう。

しかし「一般的審級」が振り出されるならば、その中には弱さ、無能、限界や不安が潜んでいる。なぜならすべての客観的審級は、何よりもまず、常に危険で強烈な個々人、単に犯罪的個々人ばかりでなく、改革的な個々人の権力、特異性、気分や恣意に対する防波堤としてのみ捉えねばならないからである。客観性、それは平均である。なぜなら平均は、国家、社会、国民、祖国などのような結局は空虚な抽象概念を口実に、個人の良心を利用するからである。ここには、一人の経験豊かな政治家の途轍もなく真実な言葉が当てはまる。「自分がどうすべきかを言ってくれる審級が存在するときには、すべての人間は喜ぶ。不確かな、しかし決定的状況の中で自己責任から解放されること、これは船酔いから覚めたような影響を与える。」

グループの中で、グループと共に生き、グループから判断や栄誉を得ているすべての不自由で無思慮な大衆、この大衆の生の欲求に実際属しているのは、次のことである。すなわち、単なる個人的倫理（そして別な倫理は存在しない）に対して各人が単独では担いきれない責任を、グループが彼らに代わって引き受けるということである。たとえば、革命、戦争、大衆暴動、反乱における先祖返りの獣的な衝動の殺害、それどころか神聖化に関して、そうした関係にある。歴史上の危機の時代には犯罪や犯罪者の数が低下するという統計的事実は、（たとえばJ・ブルクハルトがたいそう素朴に主張しているように）こうした「偉大な時代」には人間はより高貴に、より良い心構えとなるということからはけっして説明されない。そうではなく、国家、グループ、国民が多くの犯罪の責任を引き受け、若干の残虐な犯罪的衝動が突然「客観的目的」のために許され、それどころか神聖化されるということからのみ、説明されるのである。

こうして、肉と血から成る生きた個人である我々は、幼いときからずっと、想像上の亡霊の偉大な大帝国の中に、すなわち現存するものとしての社

会、官庁、国家や教会、階級やグループの中に、そして無慈悲なまったく想像的抽象概念の中に、すなわち正義、法律、善、威厳、人間、栄誉、結婚、公益、秩序、学問、家族、祖国などの中に、置かれている。この空想的暴力の内部において、あらゆる生きた個人は、最良の人間ですら、何らかの名の下に、あらゆる他の生きた個人に対する猟犬や悪魔に育てられる。その結果、人間の個別の生はまさしく理想そのものの勝利として結局はきわめてリアルな地獄となるのである。

## 15　歴史の疑念の限界

ところで、確かに我々の想像によってのみ力であり、服従によって暴力である「想像的諸力」に対するこの批判は、よく注意してほしいが、もちろん冷静な現実思考の立場についてのみ当てはまるのである。この批判は、けっして現実ではない諸現実、つまり抽象概念や亡霊に向けられるのである。しかし、だからと言って、これら抽象概念や亡霊がまったくの無であると主張しているわけではない。

多数の人々の合唱、ことによるとかすれた声や信仰心のない人々の合唱が、それぞれの歌い手よりも美しく、清らかでありうるように、あるいはゴシックの大聖堂がそれを建設したすべての人々よりも敬虔で神聖でありうるように、人間の行為や人間の目標としての歴史は、すべての現実よりも高尚なものや価値あるものを含んでいることがありうる。そして憶測的現実学としての歴史が我々の認識批判によって決定的に失うであろうもの、それは、理想の建設としての歴史にとって役立つものとなりうるのである。

## 訳注

訳注 1）

ポモナ（Pomona）は、ローマの果物（poma）の女神。

訳注 2）

ティムール（Timur, 1336-1405）はチャガタイ・ハン国の軍事指導者、ティムール王朝の建設者。中世アジアを代表する軍事的天才と言われ、中央アジアから西アジアにかけて、かつてのモンゴル帝国の半分に匹敵する帝国を建設した。しばしば征服した都市で大規模な破壊と虐殺を行った。

訳注 3）

第一次世界大戦の西部戦線の緒戦における重要な戦いの一つであるリエージュの戦いで、ドイツ軍がベルギー東部の重要都市リエージュの要塞を攻略したこと。

訳注 4）

第一次次世界大戦のバルカン半島での多くの戦いはベオグラード周辺で起こった。ベオグラードの暗雲の形成とは戦闘での砲煙のことを指している。

訳注 5）

第一次世界大戦の緒戦においてドイツ軍はベルギーのルーヴァンに侵入し、虐殺を行い、市街を焼き払った。

訳注 6）

オウィディウス『変身物語』1：87　（中村善也訳、岩波文庫、1997 年、14 頁）

訳注 7）

ウィリアム・ゴドウィン（William Godwin, 1756-1836）はイギリスの政治評論家、著作家。フランスの百科全書派をイギリスに紹介し、無政府主義思想の先駆者となる。主著『政治的正義論』（1793）の中で、政府および私有財産を否定し、社会的生産物を平等に分配する社会を主張し、当時の思想界および労働者階級に大きな影響を与えた。

訳注 8）

トーマス・マルサス（Thomas Malthus, 1766-1834）はイギリスの経済学者。ゴドウィンの『政治的正義論』などに見られる社会主義思想を批判して『人口論』（1798）を書き、理想社会の実現に関する見解を発表した。彼の「人口法則」によ

れば、人口の自然増加は幾何級数をたどるが、生活資料は算術級数で増加するにすぎないから、この過剰人口による貧困の増大は避けられない、これに対する唯一の方策は、禁欲を伴う結婚年齢の延期、すなわち「道徳的抑制」である。この学説は、人間の不幸を宿命論的な自然法則の結果であるとし、これにより資本主義社会の矛盾を合理化して社会主義思想に反撃を加えたものである。

訳注 9）

これはゲーテの『ファウスト』第一部「書斎」の中のメフィストの言葉、「きみ、すべての理論は灰色で、生命の黄金の樹こそ緑なのだ」を踏まえている。

訳注 10）

ジェームズ一世（James Ⅰ, 1566-1625）。イングランド王。王権神授説をかざして議会と衝突し、国教主義を強調して新旧教徒の信頼を失い、旧教徒の火薬陰謀事件を引き起こした。議会は事ごとに王の政策を批判し、王は議会の承認を得ないで課税しようとした。衒学的で、「最も賢明な愚人」と評された。

訳注 11）

ジョージ三世（George Ⅲ, 1738-1820）。イギリスの議会が確立に向かいつつあった時期に、実権ある国王として、みずからの国政に対する指導力強化を試みたが、アメリカ 13 植民地に対する政策に失敗し、アメリカ独立運動を引き起こし、これらの植民地を失った。晩年は精神異常となり、廃人の生活を送った。

訳注 12）

フリードリッヒ・ヴィルヘルム一世（Friedrich Wilhelm Ⅰ, 1688-1740）。ブランデンブルクの選帝侯でプロイセン王。粗暴で無教養だったが、財政・軍制の改革によってブランデンブルク＝プロイセンの強大化に努め、軍人王と呼ばれた。

訳注 13）

フリードリッヒ・アウグスト一世（Friedrich August Ⅰ, 1750-1827）。ザクセン選帝侯、ザクセン王。父の死後、選帝侯を継いでフリードリッヒ・アウグスト三世を名乗る。対フランス同盟戦争に参加、イェナの戦いの後に脱退し、ライン同盟に加わり、ナポレオン一世より王の称号を与えられ、フリードリッヒ・アウグスト一世となった。以後フランスと結び国力を伸ばしたが、ライプチヒの戦いで捕らえられ、国土はロシアとプロシアの支配を受け、ウィーン会議では選帝侯時代からの世襲領の他はプロシアに奪われた。

訳注 14）

カール十二世（Karl Ⅻ, 1682-1718）。スウェーデン王。15 歳で即位後、まもなく北方戦争をおこしデンマークに侵入、ナルヴァの戦いでロシア軍を破り、さらにポーランドを蹂躙した。しかしポルタヴァの戦いでロシアに大敗、トルコに逃れ、帰国後も抗戦を継続、ノルウェーを攻撃中に戦死した。

訳注 15）

これはデンマークではなくスウェーデンの王グスタフ三世か。グスタフ三世（Gustav Ⅲ, 1746-1792）。王権の衰えたときに即位し、一挙に貴族政治を倒して王権を回復した。しかしロシアと無用の戦いを遂行し、また豪奢を愛したため重税を課するにいたり、他方、貴族は自己の権力を拡大しようと激しく彼に対抗した。ストックホルムの劇場で暗殺された。

訳注 16）

フェルディナンド四世（Ferdinando Ⅳ, 1835-1909）。父レオポルド二世の退位によりトスカナ大公となったが、トスカナがサルディーニャ王国に合併されたため、オーストリアのザルツブルグに移り住んだ。

訳注 17）

カルロス四世（Carlos Ⅳ, 1748-1819）のこと。スペイン王。精神薄弱であったため、王妃の政治干渉を許し、彼の寵臣で王妃の愛人ゴドイを宰相とした。フランス革命政府と戦い、その後ナポレオン一世に屈従してイギリス、ポルトガルと戦い、トラファルガーの海戦で全艦隊を失った。

訳注 18）

ピョートル一世（Peter Ⅰ, 1672-1725）。ロシア皇帝。ロシアの近代化を志向し、西欧諸国へ旅して見聞を広め、技術者や職人を多数雇い入れた。1695 年トルコと戦ってアゾフを得、スウェーデンと北方戦争を戦ってバルト海沿岸地方を併合し、ペテルブルグを築いた。この間、軍制改革、海軍建造の財源捻出のため人頭税を設けたり、商工業を奨励。また行政機構や社会制度を整備して、国際的地位を高めた。

訳注 19）

イヴァン一世（Ivan Ⅰ, ?-1340）のことか。イヴァン一世はモスクワ大公。キプチャク汗国に取り入って、諸公国に対する長上権（ウラジーミル大公の位）を得、諸公国が汗国に納める貢納の徴収を委任されたが、その一部を占有、また買収、征服などによって多くの領土を併合して、のちのモスクワ公国によるロシア統一の基

礎をつくった。

訳注 20）
ルイ十四世（Louis XIV, 1638-1715）。フランス王。「太陽王」と呼ばれ、その治世はフランス絶対王政全盛期をなし、ヨーロッパにおける国際的位置は上昇し、美術と文学も発展した。彼は対外戦争を積極的に行って領土を拡張し、対内的には権威的・中央集権個人支配の体制を築き、神権的絶対主義の典型をなした。

訳注 21）
エカテリーナ二世（Ekaterina Ⅱ, 1729-1796）。ロシアの女帝。ドイツ生まれ。ロシア皇帝ピョートル三世の后となるが、即位まもない夫を近衛連隊の支持で廃し、自らが帝位につき、廃帝を殺害させた。啓蒙専制君主として知られ、ヴォルテールと文通し、ディドロやアランベールの助言を求めた。農奴制度改善を企図したが、貴族の反対で失敗。プガチョフの反乱とフランス革命により保守的となり、貴族の特権を拡大強化し、批判する者を追放・投獄した。ロシア－トルコ戦争、ポーランド分割など、対外的にも積極政策をとった。

訳注 22）
カール六世（Karl Ⅵ, 1685-1740）。ハプスブルク帝国君主で、正式にはハプスブルク家第 12 代神聖ローマ帝国皇帝。ハプスブルク家最後の男系男子で狭義には同家最後の皇帝。さらにハンガリー王、ボヘミア王。マリア・テレジアの父。

訳注 23）
フランツ一世（Franz Ⅰ, 1708-1765）。神聖ローマ帝国皇帝。ヴィーンでカール六世の宮廷で教育され、マリア・テレジアと結婚し、ハプスブルク・ロートリンゲン家の祖となる。マリア・テレジアと名義上の共同統治者となったが、政治的には無力であった。

訳注 24）
フランツ二世（Franz Ⅱ, 1768-1835）。神聖ローマ帝国皇帝。オーストリア皇帝。フランス革命、ナポレオン戦争の混乱時代に即位し、絶対君主制の維持に努めたが、ナポレオン一世およびライン同盟政策による圧迫を受け、神聖ローマ帝国の解体を宣して退位。娘マリア・ルイザをナポレオンと政略結婚させ、またロシア遠征に援軍を派遣したが、のちに解放戦争に参加しオーストリアの維持を図った。

訳注 25）
カール七世（Karl Ⅶ, 1697-1745）。バイエルン選帝侯。神聖ローマ帝国皇帝。

ヨーゼフ一世の娘と結婚したが、彼女はすでに相続に関する一切を放棄していた。カール六世の死後、家憲に反してオーストリア王位継承戦争を開始し、フランスの援助を得て皇帝に選出されたが、マリア・テレジアとの戦いに敗れた。

訳注 26）

ルイ十五世（Louis XV, 1710-1774）。フランス王。わずか5歳で即位。オルレアン公フィリップ二世が摂政として政務を取り仕切り、成人後はブルボン公ルイ・アンリ、次いで優れた政治家であるフルーリー枢機卿が執政しフランスは繁栄。その後、親政を行い、ポーランド継承戦争で領土を得たが、オーストリア継承戦争では得るものはなく、戦争により財政が逼迫。七年戦争ではアメリカ大陸の権益を失い、フランスの衰退を招いた。多くの愛人を持ち、特にポンパドール夫人とデュ・バリー夫人は彼の治世に大きな影響を与えている。

訳注 27）

ジョージ四世（George Ⅳ, 1762-1830）。イギリス王。放縦な生活に浸り、しばしば巨額の負債を議会に支払わせた。カトリックの婦人と密かに結婚し、無効とされたが交渉を継続、父の選んだ妃と結婚したが間もなく別居。父に反抗してホイッグ党員と親しくしたが、父の発狂（彼の行状もその原因となった）後はトーリー党に好意を持ち、あらゆる改革に反対した。即位後、妃を離婚しようとして物議をかもし、王の権威は大いに失墜した。

訳注 28）

レオポルト二世（Leopold Ⅱ, 1747-1792）。ハプスブルク帝国君主、神聖ローマ帝国皇帝。フランツ一世とマリア・テレジアの子。プロイセンと連合してフランスに当たり、対仏戦争直前に死んだ。

訳注 29）

フリードリッヒ・ヴィルヘルム二世（Friedrich Wilhelm Ⅱ, 1744-1797）。プロイセン王。フランス革命に干渉し、第2次・3次のポーランド分割を行う。明るい開放的性格の人であったが、反面女色におぼれ、政治的識見と首尾一貫性に欠け、寵臣に動かされた反啓蒙主義的宗教政策で不評を買った。ただし学芸には理解があり、彼の時代にベルリンはドイツの中心的文化都市に発展した。

訳注 30）

デュ・バリー夫人（Madame du Barry, 1743-1793）。ルイ十五世の寵妾。パリの裁縫女であったが、デュ・バリー伯と結婚、ついで宮廷に入り勢力を振るった。のちにロベスピエールにより処刑された。

訳注 31）
ポンパドゥール夫人（Madame de Pompadour, 1721-1764）。ルイ十五世の愛人。卑賤の出身だったが、その美貌と才能と野心によってルイ十五世に近づき、侯爵夫人、公爵夫人、王妃侍従となり国政を操縦するに至った。芸術の保護育成には貢献したが、彼女の贅沢な生活で浪費した国費は莫大であった。

訳注 32）
エカテリーナ一世（Ekaterina I, 1684-1727）。ロシアの女帝。リトアニアの農民の娘でスウェーデン人に嫁いだが、北方戦争中にロシア軍の捕虜となり、メンシコフ公の家でピョートル一世（大帝）に知られ、その寵を得て三女を生み皇后となった。大帝の死後、メンシコフ公一派に擁立され、軍隊の支持を受けて帝位についた。彼女はロシア語が書けなかったと言われる。

訳注 33）
カリグラ（Caligula, 12-41）。ローマ皇帝。カリグラとは兵士のつけた綽名で、若いとき彼が履いていた「軍隊靴」の意。はじめは善き皇帝として迎えられたが、即位数か月後の重患以来性格が一変し、残酷と浪費により諸人に恨まれ、また自己の神性をも主張するに至り、のちにエジプトで殺害された。

訳注 34）
アッピウス・クラウディウス・カウデクス（Appius Claudius Caudex, 生没年不明）のことか。共和制ローマの政治家、軍人。パトリキ（貴族）のクラウディウス氏族の出自で、紀元前 264 年に執政官を務めた。第一次ポエニ戦争の口火を切った人物。カウデクスには「愚か者」という意味がある。

訳注 35）
ユリア（Julia, B.C.39-A.D.14）。ローマ皇帝アウグストゥスの娘。美貌と才気に恵まれていたが徳性を欠き、従兄マルケルスと結婚し、その死後アグリッパと再婚、アグリッパの死後、ティベリウス（のちの皇帝）に嫁いだ。素行放逸のため父帝の命令でパンダテリア島に流され、のちレギウムに移され、同地で死んだ。

訳注 36）
メッサリナ（Messalina, 20-48）。ローマ皇帝クラウディウスの皇后。後世のメッサリナの評価は非常に低く、スエトニウスもタキトゥスも彼女の冷酷さ、強欲さを厳しく非難している。性的放蕩と残虐をほしいままにし、また、クラウディウスをそそのかし、彼女を不快にさせた者や敵対者を処刑させたりもしたという。

訳注 37）

ヨーゼフ二世（JosephⅡ, 1741-1790）。神聖ローマ帝国皇帝。フランツ一世とマリア・テレジアとの長子。父王の死後、皇帝になり、マリア・テレジアは彼を共同統治者にしたが、政治には関与させなかった。母の死により親政を開始し、啓蒙専制君主として積極的な近代化政策を打ち出し、中央集権的国家の建設を目指して、さまざまな分野での改革に取り組んだ。

訳注 38）

オレンジ公（Prince of Orange）ウィリアム三世（WilliamⅢ, 1650-1702）。オランダ総督、イギリス王。ルイ十四世のオランダ侵略に対抗して名を挙げ、イギリスのジェームス二世の娘メアリ二世と結婚。要請にこたえて兵を率いてイギリスに上陸し、名誉革命を遂行し、権利宣言を承認してメアリとともにイギリス王位につき、議会を中心とする立憲政治の道を開いた。外国人としてイギリス国民には好かれなかった。

訳注 39）

イヴァン四世（Ivan Ⅳ, 1530-1584）。モスクワ大公にして全ロシアのツァーリ。3歳で即位。摂政だった母の急死後、暫く貴族政治が続いたが、やがて親政し、初めて正式に全ロシアのツァーリと称し、士族を支柱としてその権力を強化した。士族を中心とする行政組織と軍隊組織を置き、貴族に対する恐怖政治を行い、「雷帝」と綽名された。農民の状態は悲惨で、東方、南方への逃亡が行われたので、労働力を確保するため、移動の自由を制限し、農奴の圧迫を強化した。

訳注 40）

ヘンリー八世（Henry Ⅷ, 1491-1547）。イギリス王。夭折した兄の寡婦キャサリンと結婚したが、男子の後継者が生まれず、またアン＝ブリンと恋におちたため離婚を決意。離婚がローマ教皇に認められなかったため、国をあげてローマ教会からの独立を決意し、首長令によってみずから教会の首長となり、イギリス国教会をつくった。結婚した妻 6 人のうち 2 人を処刑するなど残虐な君主であったが、中央集権の実をあげ、絶対主義を発展させた。

## テキスト

Theodor Lessing: *Geschichte als Sinngebung des Sinnlosen*.C.H.Beck'sche Verlagsbuchhandlung Oskar Beck,München 1919

## 参考文献

『岩波西洋人名辞典』（岩波書店、昭和 31 年）
『世界史小辞典』（村川堅太郎、江上波夫ほか編、山川出版社、1998 年）
ウィキペディア

（たじま・まさゆき　法学部元教授）